



BONSAI Coiffure

「ミソの黒髪」  
実際こんな髪形はありませんが、完成したら究極の日本髪でしようか。(笑)

平凡な一市民である私にとって、風刺漫画を描くことは、世間に物申す手段であり、仲間とつながるインフラでもあるが、父親の脳梗塞と入院を機に、それまでの生活サイクルを見直さざるを得なくなった。

もう、取材時間が取れそうにない。定例展覧会の休止を決めた私は、雑誌や業界紙で小さく作品を発表していたものの、それまで支えてくれた周囲の期待に思うように応えられず、作家や活動家のエリアからも距離を置くようになっていた。

そんな毎日に新たな活路を見出すべく、在宅で無理なく作品を発信できないかと注目したのが、海外コンペへの応募だった。以前、国際交流パーティーで、語学の苦手な私は、自作の風刺漫画持参でコミュニケーションを取った経験がある。言葉の壁を越えて思いが伝わった時は、小さな自分にも少し自信がついたものだ。

そして、その記念すべき最初の海外コンペ作品の宛先が、ポーランドのレグニツァだったことから、今回この原稿を書くご縁に恵まれている。当方、恐縮しきりであるが、さらに重ねて白状すると、この国を一番に選んだのは特別な思いではなく、たまたま昨年末に見つけた 2012 年最初の海外コンペの開催国がポーランドだった、という実に安直かつ体たらくな理由なのだ。(本当にゴメンナサイ)

さて、一口に海外コンペといっても、作品を丸めて送っていいのか、医者がレントゲンを入れるような大型封筒があるのか、航空便でどれくらいの費用と日数がかかるのか、エントリー用紙は英語表記なのか、自己紹介欄にはどんなことを記入すべきか、まるで見当がつかない。こんな些細なことから、具体的な作業を積み重ねるのだろう。

実は私、国内の風刺漫画コンペですら、それまでずっと敬遠していた。というのは、社会適応能力

## ～国際漫画コ

私はこうして北海道ポーランド文化協会にたどりついた！

ゼロの大御所作家が、現実逃避の成れの果てに手がけた作品を、自分は評価していないし、更に、その人たちが審査員をつとめるご大層な大会なんざ、参加する意義を見出せないのだ。まあ偉そうに吠えたが、半ば庶民のひがみだ。

もちろん自分ごときに、世界レベルの実力が無いことは百も承知しているが、その分、余計なしがらみがないし、精神衛生的には誠にありがたいこともあった。

さて、手探りで走り始めたが、まず作戦を練ろうにも、コンペ参加以前に、その国の基本的な知識が必要だろう。ポーランド初心者私のイメージだと、コペルニクス、ショパン、キュリー夫人、…ぐらいのレベルだ。あとは、資料書棚に世界ジョーク集がある程度で、大国が小国を見下すお決まりのトポスから、フランスはベルギーを、ドイツはポーランドを茶化した感じの失礼な内容だ。まともな資料にするには心もとない。

仮に、あのコペルニクス像をモチーフに使ったとして、手に持った地球儀をアイスクリームに変えたイラスト a と、地球儀をそのままにしてコペルニクスをヒトラーに替えたイラスト b とでは、さらに私のような浅知恵の黄色いサルが描いたとして、現地の人にどう受け止められるか、想像力なり具体的な精査が必要になるだろう。

とりあえず、仕事で国内外を行き来する幼馴染と、アウシュビッツ平和ツアーを担当するツアーガイドに話を聞いた。ステレオタイプながら、カトリック、親日国、ソ連嫌いなどのキーワードを貰い、最近だと日本のアニメやキャラクターも人気とのこと。

次に、イラスト投稿サイトで知合ったポーランド女性に、私の作品の中から好きなものを数点選んでもらって、大まかな傾向と対策を考えた。自分はポーランド語が出来ないので、たどたどしいインチキ英語メールを駆使しつつ、細かい情報を集めていく。

# ンペへの挑戦～

ふとした出会いがきっかけで誰かとつながり、新しい自分が浮かび上がる。そんな経験を「のぞわさん」に紹介していただきました。あたたかいイラストと一緒に心もほっこり。

どの国にも言えることだが、政治はおちよりの対象に出来ても、宗教はそういう訳には行かず、この部分の取扱いには注意が必要だと改めて感じた。

その後、北海道ポーランド文化協会なる団体をネットで見つけるも、記載されていた電話番号が通じず、そろそろ調査に行き詰まりを感じた。

「もう描画に取り掛かる。これ以上、市内で情報が得られそうにない。運良くポーランド人と繋がったとして、漫画に興味があるかも言葉が通じるかもわからない…。」

半ば諦めかけていたところ、行きつけのフェアトレードレストランから、思わぬ情報を耳にした。時々店に訪れる男性客が、昨年そのポーランド協会と共同で、映画祭を開催したという。私も面識ある人だったので、早速 SNS 経由で連絡を入れてみると、自分から協会事務局につないであげると、なんと嬉しい協力と出会いの機会を得た。

コンタクトの取れたポーランド協会の窓口は、大学教員の佐光さんだった。そして、さらなる情報を得た。構内の学生食堂に、ポーランド人の集う定期交流会があり、その人たちは日本語も話せて、日本文化にも関心のある一団のようだった。

「うわあ、この人たちに会いたい。でも、海外から勉強に来るような人は、おそらく上流階級出身だろう。今の私にとってジャストミートな集会でも、生来の貧乏人で人生観の異なる下衆な私を、こちらの交流会の皆さんは受容れてくれるだろうか…。」

悩んでいても先には進まない。まずは、佐光さん経由で訪問の連絡を取り付け、平日の休みを調整して、提出候補作品を手にも恐る恐る顔を出した。事前に事情を聞いていた一団は、食事の最中だったけど、とても温かく迎えてくれた。

持参作品数点の人気投票をしつつ、作品毎に感想や意見を求めた。自分一押し震災復興ネタが、必ずしも外国人に受容られる訳ではなく、ま

「究極のレジャー」  
ギリシア経済危機が話題ですが、遊び  
呆けた報いを見る向きもあるように…。



たワンポイントの工夫で、海外仕様に変身する作品があるのも、勉強になった。自分目線だと、各々の制作過程がバイアスとなり、作品の正当な評価がしにくくなる。その点、他人目線の方が、そういう背景が分からないし、ある意味シンプルかつシビアだろう。

今回は親日国のポーランドが開催地ということで、国際ニュースと日本文化のネタを抱合せて、提出を計画した。国際作品は自分でほぼ決めていて、ギリシア経済を題材にしたものだ。実際に反応も良く、そのまま採用する。一方、日本作品では活け花ネタが一番人気だった。が、一緒に持ってきた盆栽ネタを、その場にいた女性のアドバイスに従って描き直せば、外国人にも受容られそうな路線になったので、今回はその盆栽作品を海外用にアレンジして、提出することにした。

このときの小さな経験が後押しとなったのか、この日以降、国際漫画コンペには現在までイタリア、中国、そしてポルトガルにも作品を送っている。ポーランドコンペは、3月初旬にWEB上で審査結果が出るが、入賞云々ではなく、新たな活動に喜びの一步を踏み出せたのは、協力してくださった周囲の皆様のおかげであり、感謝にたえない。

のぞわゆきお(風刺漫画家)

1968年、札幌市生まれ。

小樽商科大学卒。

社会人から創作活動をはじめた、

技術のおぼつかない非・芸術エリート。

本業の傍ら、限られた時間と予算内で、執筆・描画・工作などをこなす。

自らの作品発表は、美術でなく報道と位置づけ、思いの伝達手段の一つ。

